

元日の朝。新聞2紙を読む。年賀状に目を通す。昼になる頃、お屠蘇を飲み雑煮を食べ、サッカーの天皇杯を見てから墓と神社に参る。いたって穏やかな一日を過ごすのが、我が家の習慣となつて長い。

ただ、僕が20代半ばから40歳頃まではなかなかだった。家の者は、2日に年賀に訪れる友人知人をもてなすため、正月前から大量のおせちや鍋物などの準備におおわらわ。僕も受け入れ態勢を整えるために右往左往。最初はわずかな友人たちと始めたのだが、どんどん膨らみ、朝から晩まで若男女50人になった年も。雪道をバイクのタイヤに荒縄を巻き付けてやってくる猛者までいた。

絵に囲まれた仕事場で車座になって呑み、食い、歌

う。部屋からあふれ、台所まで押し寄せ腹ごしらえしているものたちも。ピアノ、ギター、ヴァイオリン、ポング、笛、鍋や皿まで打ち鳴らしどんちゃん騒ぎ。エロティシズムとは「などと一席ぶつものも。正月とはいえ、古くからの静かな住宅街にあっては大いに迷惑。「うるさい！」と怒鳴

正月 静謐と喧騒



り込まれることもあった。勢いそのまま外に出、楽器を手に暗がりをごろごろ歩きながら「オネリだ！」なんて街に繰り出す。飲み屋に押し入ろうとする多勢の輩に、マスターはたまらずビールを一杯ずつ振る舞っての追い返し作戦。酔いどればかり、いろんな事件もあったが、寛容も不寛容

も生き生きとした人間臭さを残していた時代であった。こんなことを書き連ねると、よほど付き合いが多そうだが、普段はごく稀にしか人と接することはない。今もって不思議な、一月二日だけの現象であった。しかし、そんな無茶振り

が退いてしまったのだ。翌3日の片付け掃除まで、丸ごと忙殺される正月。マンネリの兆しを感じ始めていたこともあり、それを機にやめた宣言を發した。以来、アツンと途絶え、誰もこなくなつた。

令和2年、正月の朝がやってきました。2階の仕事場に上がり窓から外を眺める。ザクロの木に、とり残しの干涸びた実がぶら下がり、葉の落ちた枝越しにいつもと変わらない景色が広がる。だが、それとなく清澄な空気を感じるのには、どこか改まるからだろう。日本人に染み込んだ精神性。正月という日を境にして、過去と未来のひとつの区切りとする。人々はこの日、ちよつと身を引き締め、敬虔な気持ちにすらなるのだろう。

(吉田 淳治・画家)